



「生死出づべき道」を求めて

普賢保之(ふげん やすゆき)

宗祖親鸞聖人が求められたのは、^{えしんにしょうそく} 恵信尼消息 ^{しょうじい} にも見えるように「生死出づべき道」であります。「生死出づべき道」とは、^{しくはっく} 四苦八苦とあらわされる自らが抱える苦の解決の道であります。宗祖は九歳で^{とくど} 得度し、二十年間比叡山で自力修行に励まれました。しかしそこに「生死出づべき道」を見出すことはできず、^{ろっかくどう} 六角堂での百日間の^{さんろう} 参籠を経て、^{ほうねんしょうにん} 法然聖人 ^{せんじゅねんぶつ} の説く専修念仏の教えに「生死出づべき道」を見出されました。

聖人は『^{きょうぎょうしんしょう} 教行信証』の中で、自ら、

^{けんにかのとのとり} 建仁 ^{れき} 辛酉 ^{ぞうぎょう} の暦、^す 雑行 ^き を棄てて本願に帰す。(『^{しやくばんせい典} 注釈版聖典』四七二頁)

と述べられています。「建仁辛酉の暦」とは、建仁元年(一二〇一)で、宗祖二十九歳の時にあたります。「雑行を棄てて本願に帰す」とは、^{ぎょう} 自力の行 ^{であ} を捨てて本願の教えに出遇ったことをあらわしています。つまり宗祖は「生死出づべき道」を二十九歳の時、本願の教えに見出されたのです。

^{めんじゅ} 宗祖面授 ^{ゆいえんぼう} の門弟である唯円房 ^{たんにしょう} が書かれた『^{たんにしょう} 歎異抄』には、

弥陀の本願まことにおはしまさば、^{しやくそん} 釈尊 ^{きよごん} の説教虚言なるべからず

(『^{しやくばんせい典} 注釈版聖典』八三三頁)

という聖人のお言葉が紹介されています。このお言葉は、阿弥陀仏の本願が真実であるなら、それを説き示してくださった釈尊の教えがいつわりであるはずはない、という意味であります。しかも「阿弥陀仏の本願が真実であるなら」といっても、これは決して本願が真実かどうか確信は持てないけれども、もし仮に本願が真実であるとすれば、という意味ではありません。この文は阿弥陀仏の本願が真実であるから、という意味なのです。

また一般的には、順番も「釈尊の説教まことにおはしまさば、弥陀の本願虚しからず」と、釈尊、弥陀の順番の方が分かり易いかもしれません。しかし宗祖においては、まず弥陀の本願があって次に釈尊の教説の

順となっています。^{しょうしんげ} 「正信偈」でも同様の順番になっています。まず弥陀の本願を^{さんだん} 讃嘆し、続いて釈尊の

^{しゅっせほんがい} 出世本懐、^{しちこうそう} 七高僧の功績が讃嘆されています。

これらのことは何を意味しているのでしょうか。前述したように宗祖がひたすら求めたものは、「生死出づべき道」であります。その「生死出づべき道」を宗祖は阿弥陀仏の本願に見出されたのです。弥陀の本願に出遇って自らがかかえていた生死の問題が、はじめて解決したのです。だからこそ、宗祖は本願こそが唯一真実の教えであるといいただくことができたのです。また実際に、本願を真実の教えであるといいただくことができたからこそ、それを説かれた釈尊の教えがいつわりであるはずはない、と言い切ることができたのでしょう。

浄土真宗は、今、生きている間の教えではなく、死んだ後のことを説く教えであると誤解されがちです。

それは浄土真宗では、決してこの世界での^{おうじょうじょうぶつ} 往生成仏 ^{を説かないことと関係している} を説かないことと関係しているかもしれません。し

かし宗祖は本願に出遇うことにより、この世界において生死の解決をはかられたのです。その生死の解決とはどのようなものだったのでしょうか。宗祖は『教行信証』^{しんかん}「信巻」に、

悲^{ぐとくらん}しきかな愚^{あいよく}禿^{こうかい}鸞^{ちんもつ}、愛^{みょうり}欲^{たいせん}の広^{じょうじゅ}海^いに沈^{しんしょう}没^{さとり}し、名^{たの}利^はの太^{いた}山^{いた}に迷^は惑^{いた}して、定^{じょうじゅ}聚^いの数^いに入ることを喜^いばず、真^{しんしょう}証^{さとり}の証^{さとり}に近^{たの}づくことを快^はしまざることを、恥^はづべし傷^{いた}むべしと。

(『注釈版聖典』二六六頁)

というお言葉を残されています。このご文は「悲しきかな愚禿鸞」とあることから分かるように、本願の教えによって照らし出された宗祖自らのお姿を悲歎されたものです。悲しいことに、私（宗祖）は、愛欲の広^{しろうじょうじゅ}い海^{くらい}に沈^{しろうじょうじゅ}み、名^{くらい}利^{くらい}の深^{くらい}い山^{くらい}に迷^{くらい}って、本願のはたらきによって、成^{くらい}仏^{くらい}することに決定^{くらい}した正^{くらい}定^{くらい}聚^{くらい}の位^{くらい}に入れていただいているにも拘らず、それを喜ぶこともできず、真^{くらい}実^{くらい}のさ^{くらい}とりに近^{くらい}づくことを楽しいと思^{くらい}うこともできない、何^{くらい}と恥^{くらい}ずかしく、嘆^{くらい}か^{くらい}わしいことであるか、と悲^{くらい}嘆^{くらい}されているのです。このお言葉はまさに悲歎をあらわすお言葉ではありますが、同時に喜びも表現されています。それは「定聚の数に入ることを喜ばず」、あるいは「真証の証に近づくことを快しまざる」というお言葉の上に^{うかが}窺^{うかが}うことができます。「定聚の数に入ることを喜ばず」とは、本願力^{ほんがんにき}によってすでに正定聚の位^{ほんがんにき}についているにも拘らず、それを喜べないという意味ですが、裏返せば本来喜ぶべきことを喜べない自分ではあっても、本願力によって正定聚の位^{ほんがんにき}につかせていただいているという喜びのあることが分かります。

このように宗祖は、生死の解決を本願の教えによってはかられたのです。それは、本願との^{ちぐう}値^{ちぐう}遇^{ちぐう}を通して、^{ぼんのう}煩^{ぼんのう}悩^{ぼんのう}にまみれたわが身^{ぼんのう}を知らされることであり、同時にそのわが身^{せつしゆ}が本願力^{せつしゆ}によって撰^{せつしゆ}取^{せつしゆ}されていることを知らされることであつたのです。宗祖はその本願の法^{せつしゆ}を生涯^{せつしゆ}を通して説^{せつしゆ}いていかれたのです。

(司教)